



* 奥付 *
『瀕死の探偵』鳴原あきら
二〇一八年十一月二十五日発行
発行者 恋人と時限爆弾
第八回テキレボアソトロ「花」用書き下ろし

瀕死の探偵

鳴原あきら

「満潮音、起きてるか」

門馬知恵蔵は一瞬、眩しさに目を細めた。

隅から隅まで純白の病室。横になっっている満潮音純の寝間着までもだ。

「意識はあるよ。話もできる」

「年齢を超越した美貌が、今日はいささかやつれている。額にかかった淡い色の髪も乱れれていて、知恵蔵は一瞬、手を伸ばしかけたが、

「痛みは？」

「もう、あんまり。麻痺が残らなきゃ、近いうちに退院できるって」

「そうか」

知恵蔵はベッド脇に椅子を引き寄せて座った。声も低く、

「興奮所の方は当分、閉めておくことにした。落ち着かないし、仕事にならない」

「それでいいよ。この状態じゃ僕が何も出来ないし、変なのに押しかけられても困るし」

「この病室にくるのも大変だった。ボデイイチェツクもされたし」

「完全看護、部外者立ち入り禁止だからね」

「現役大臣の一人息子なのに、見舞いの花のひとつ、ないんだな」

「あるわけないだろ」

「そうだな。花を使って人を襲う連中がいるんだから」

「何だ、この種類認識は？」

確かにクモ毒は、重篤な障害を引き起こす可能性があるが、死に至ることはまれだ。そもそも、花束を投げつけるというのも変な話だ。クモに衝撃を与えて攻撃させるためか。それにしても「私もおも参りをさせてください」とそつと近づくべきではないのか。明るるところを好まない種類のクモらしいから、いつも白装束の満潮音に対して、軽くぶつつけるだけでも囁んだ可能性は高い。雑な実行犯、と満潮音は言つたが、彼の父親に對してても、たいした威嚇になるとも思えない。殺人事件に発展すれば、話は別だろうが……。

物思いにふけつていると、トレイに注射器をのせた看護師とすれ違った。

《待てよ。ゴケグモの抗毒薬にはウマ由米の血清を使うから、血清の追加時にアナファイキレーションョクを起こす可能性があるとか……間違つて静脈注射されると、死ぬ可能性も……いや、悪意ある人間なら、それを装つて別の何かを注射することだつて、ありえる》

反射的に身を翻すと、怪しい看護師は満潮音の病室に入つていくところだった。「満潮音言言！ー！」

思わず声を上げて飛び込んだ瞬間、知恵蔵は我が目を疑つた。

「皆さんは……どこから？」

偽看護師はすでに、数名の白衣の男に取り押さえられていた。布をかまされ後ろ手に縛られており、持っていた注射器も回収されている。満潮音はベッドの上で身を起こし、鋭い声で、

「本当に雑な実行犯だ。何か吐くとも思えないが、ここで自害させるなよ。念のため、爆発物も所持してないか、すぐに調べてくれ」

「驚かせてごめんよ。何かあると困るから、クローゼットの中で見はつててもらつたんだ。でも、このタイミングで来るとは思わなくてさ」

「じゃあ、私とおまえの話も」

「ぜんぶ筒抜け。いや、君、そんなに恥ずかしいこと言つてなかったよ。たぶんセーフ」

「おー！ーえー！ー！ー！」

「でも、さすがだね。看護師とすれ違つただけで危険に気づいたつてことは、僕の留守中に、悪魔の足について調べたつてことだろう。医者じゃないけど、君は立派なワトスンだ」

「クモに囁まれたつていうのも、嘘じゃないだろうな」

「それは仮病じゃないよ。まだ、よく動けない」

「本当だな？」

知恵蔵は満潮音に近づき、その頬を掌で包んで引き寄せた。

二人の顔額ははしばらく重なつていたが、満潮音はされるまま、まったく抵抗しなかった。

「……本当、なんだな」

自分から口唇を奪つたのに、腫を潤ませているのは知恵蔵の方だった。

「だから、本当だつて言つたのに」

満潮音はうすく種類を染めて、

「君がこんななに種類のなの、初めてだから、すごく、嬉しいんだけどさ」

「ん？」

「ハッ」

「医者、おまえが、起きよ」

「うん、でも入院なんて初めてだから、痛みがひいてきたら退屈で仕方なくてね。で

「そうか。とにかく、命に別状がなくってよかった」

「もう、何を読んでも、何をみても面白くないから、ぜんぶ片づけてもらった」

「具合がよくないからだ。無理をしないで寝ている」

「うん、でも入院なんて初めてだから、痛みがひいてきたら退屈で仕方なくてね。で

「そうか。とにかく、命に別状がなくってよかった」

「もう、何を読んでも、何をみても面白くないから、ぜんぶ片づけてもらった」

「具合がよくないからだ。無理をしないで寝ている」